

37. たまねぎ

・殺菌剤

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
M1	Zボルドー	散布	-	-	野菜類（キャベツを除く）
24+M1	(カスガマイシン・銅) カスミンボルドー カッパーシン水和剤	散布	収穫 7 日前まで	5 回以内	
-	(クロルピクリン) クロピク 80 ドロクロール	土壌くん蒸	-	1 回	
	クロールピクリン	土壌くん蒸	-	1 回	
M3	(マンゼブ) ジマンダイセン水和剤	散布	収穫 3 日前まで	5 回以内	
	ペンコゼブ水和剤	散布	収穫 3 日前まで	5 回以内	
M5	ダコニール 1000	散布	収穫 7 日前まで	6 回以内	
1	トップジンM水和剤	散布	収穫前日まで	6 回以内(但し、定植後は 5 回以内)	

・殺菌剤（参考農薬）

FRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
45+40	ザンプロDMフロアブル	散布	収穫 7 日前まで	3 回以内	
M3	ジマンダイセン水和剤	散布	収穫 3 日前まで	5 回以内	
12	セイビアーフロアブル 20	5 分間苗根部浸漬	定植直前	1 回	
7	パレード 20 フロアブル	散布	収穫前日まで	3 回以内	

・殺虫剤

IRAC コード	薬剤名	使用方法	使用時期	使用回数	備考
1	スミチオン乳剤	散布	収穫 21 日前まで	2 回以内	

注1) 使用回数はその薬剤の使用回数を記載しており、この他に薬剤に含まれる成分毎に、総使用回数が決められているので、農薬ラベル等を確認してそれを超えないように注意する。

注2) 薬剤抵抗性の出現を防ぐため、「FRACコード」や「IRACコード」を参考にしながら他系統剤とのローテーション使用を心掛ける（「薬剤抵抗性管理」参照）。

注3) 蚕毒・魚毒については、「56. 野菜類の総括注意」も参照する。

病害虫名（F：菌類病、B：細菌病、V：ウイルス病、O：その他の病原体）

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
苗立枯病 (F)	苗床期間	1. クロルピクリン剤などで苗床の土壌消毒を行う。土壌消毒の項を参照し、登録薬剤を用いる。	1. 毎年苗床の場所をかえる。

病害虫名	防除時期	防 除 方 法	注 意 事 項
べ と 病 (F)	9月上旬～ 11月中旬 (苗床期間) 3月下旬～ 収穫まで (特に4月 中旬～6月 月上旬)	1. マンゼブ(ジマンダイセン、ペンコゼブ) 水和剤 400 倍液、ダコニール1000の 1,000 倍液のいずれかを 10 日おきに散 布する。 [参考農薬] 1. ザンプロDMフロアブル 2,000 倍液を散 布する。	1. 多発地は2～3年休栽する。 2. 日陰や過湿地での栽培を避け、 排水と通風を図る。 3. 収穫時に病株は集めて埋める か、堆肥として完全に醗酵させ る。 4. 採種地では、食用栽培を避ける。
黒 斑 病 (F)	4月上旬～ 収穫期	[参考農薬] 1. ジマンダイセン水和剤 400～600 倍液を 散布する。	1. 発生地では連作しない。
さ び 病 (F)	5月下旬～ 7月上旬	1. 被害残渣は、ほ場外に持ち出す。 2. 肥料切れすると発生が多くなるので、施 肥を適切にする。	1. 多発地では連作しない。
灰色腐敗病 (F)	5月上旬～ 6月上旬	1. トップジンM水和剤 1,000 倍液を散布す る。	1. 病球の貯蔵を避ける。
黒腐菌核病 (F)	定植直前	[参考農薬] 1. セイビアーフロアブル 20 の 500 倍液に 5分間苗根部を浸漬させる。	1. 薬剤防除だけでなく、残渣処理 などの耕種的防除を併せて行 う。 2. 酸性土壌で発生が助長されるの で、石灰資材などにより土壌 pH を適正に保つ。
	生育期間	[参考農薬] 1. バレード 20 フロアブル 2,000 倍液を散 布する。	
軟 腐 病 (B)	生育期間	1. Zボルドー500 倍液、又はカスガマイシ ン・銅水和剤 (カスミンボルドー、カッ パーシン水和剤) 1,000 倍液を散布する。	1. 発病前から予防的に散布する 2. 軟腐病の防除では薬剤防除だけ でなく、残渣処理などの耕種的 防除を併せて行う。
アザミウマ類 (ウイルス媒 介)	4月～6月 9月(苗床)	1. スミチオン乳剤 1,000 倍液を散布する。	1. 採種地では、食用栽培を避ける。 2. 高温乾燥時に多い。 3. たまねぎは、ネギアザミウマが 媒介するアイリスイエロースポ ットウイルス(IYSV)の伝染 源となる恐れがあるので、アザ ミウマ類の防除を徹底する。
タネバエ	植付時	1. 堆肥は十分完熟したものを施用する。 2. 前作の残渣等が十分分解してから、作付 けを開始する。 3. 土壌水分が高い条件では産卵数が多く、 幼虫の生存率が高まる傾向があるため、 排水性を確保する。	1. 多発させない環境を整えるのが 重要である。 2. 未熟堆肥や魚かす、鶏糞を使用 すると、臭いに誘引され発生が 多くなる。